

カラープレザントネスの感性効果

Affective Effects of Color Pleasantness

高橋 晋也

東海学園大学

Shin'ya Takahashi Tokai Gakuen University

キーワード：プレザントネス、コンフォタブルネス、公的／私的環境、感性効果

Keywords: pleasantness, comfortableness, public/private environment, affective effect

1. コンフォタブルネスとプレザントネス

本会副会長(1998-99)を務めた久野覚先生の元々の専門は温冷感である。彼は独自の二次元温冷感モデルを提唱し、それに基づきコンフォタブルネスとプレザントネスという2種類の熱的快適性を区別した^{1,2)}。詳細は引用文献に委ねるが、ごく簡単にいえば前者は暑くも寒くもない中立状態、後者は、たとえば炎天下から冷房の効いた室内に入ったときや、凍える身体をストーブで温めたときに感じる気持ちよさをさす。前者は「不快がない」という消極的な心地よさであり漢字で書けば「適」、後者はそれ以上の積極的な心地よさであり「快」といえる。

また、プレザントネスの特徴として以下の3点が指摘されている。すなわち、第一に暑不快または寒不快からの脱却時にのみ生じること、第二に一過性であること(時間とともに中立状態もしくは不快状態に移行する)、第三にサドンショック(急激すぎる温度変化)による不快と隣り合わせであることである。

2. 視覚的プレザントネスとカラープレザントネス

筆者は上述のプレザントネス理論を温冷感以外の感覚モダリティへ拡張し、とくに視覚においては「不変化による潜在的不快からの脱却時」にプレザントネスが生じる可能性を指摘した³⁾。温冷感と異なり視覚情報は元より多相的で変化に富むものであるが、実際のところ、日常目にするシーンは一定の枠内での変化に止まることが多い。いわば「安定的な変化」「予想を裏切らない変化」であり、これを「裏切る変化」が生じたとき視覚的プレザントネスが生じると考えられる。わかりやすい例を挙げれば、いつも見慣れた近所の風景にあってもサクラが満開になれば誰しも心が躍る。

視覚情報のうち色に的を絞っても同じことがいえそうである。我々の身の回りの人工物の色には、明確な理由なしに「これはこの色」という定番色が数多くある。かつてのランドセル(黒と赤)、病院内の制服や寝具(白)、デスク等のオフィス備品(ライトグレー)などである。これらの色づかいは無難で安心感のある、

いわばコンフォタブルカラーであり、何の不満もないが面白さはない。この物足りなさ(上に述べた「不変化による潜在的不快」)に人々が気づきはじめたのか、近年ではランドセルの色も看護師の制服の色も定番色の縛りから解かれ、バリエーション豊かになってきている。想定枠を超えた意外な色づかいの面白さ、すなわちカラープレザントネスは、古来人々の関心の高い「色の心理効果・感性効果」という文脈においても鍵を握っているように思われる。

3. 公的環境におけるカラープレザントネス

公共施設や公道など、不特定多数が利用する環境においてはコンフォタブルな色づかいが多くなる。個人の色の好みの多様性に配慮すれば、意外性や面白みはないが「誰にとっても不満のない」無難な色環境に収束するからである。やがてそれは定番色となり、公共の色環境は個性を失っていく。どこへ行っても、良くも悪くも色に心が揺さぶられることはない。まさに「暑くも寒くもない」のと同じコンフォタブルな状態である。一方、かつて世間を騒がせたいわゆる騒色問題は、そのようなコンフォタブルな色環境に出現した脅威に対する拒否反応といえる。久野理論がいうところの「サドンショックによる不快」にほかならない。「意外で面白い色(プレザントネス)」と「奇抜すぎて不快な色」は紙一重なのである。

海外で街歩きすると意外な色づかいに驚かされることがある。そもそも日本とは定番色の基準が異なるため、あるいは異国という非日常下で自らの許容水準が高くなるため、かなり奇抜なものであっても好意的に受け入れられることが多い。掲載した2枚の写真は筆者が撮影したものだが、図1は英国で見つけた緑色LEDによる歩行者誘導灯である。夜間このトンネル内はかなり暗くなり、車や人の往来がないと不安を感じさせる場所であった。そこを、場の古びた印象に逆らうような人工的な緑色光で照らすことにより、景観印象の改善と安心感の喚起に貢献していると評価された。図2はメキシコにあった、紫に照明された分離帯



図1 英国・ニューカッスル



図2 メキシコ・オアハカ

のヤシの木である。日本ではおよそありえない設計だが、筆者の主観ではまったく違和感なく、この環境固有の魅力を向上させていたように思う。いずれも日本とは異なる社会文化的文脈が前提の事例ではあるが、参考にするべき点はあるだろう。

4. 私的環境におけるカラープレザントネス

私的環境における色づかいは原則自由である。しかし実際には、自ら作り上げた“マイ定番色”による制約で自由になっていない場合が多い。とりわけ衣服の色はその典型といえ、個人のクローゼットの中は大抵同色系で統一されている。いつも着る色はコンフォタブルであり心地よい安心感を与えてくれるが、同時に「自ら知らざる楽しさ」に気づく機会を失わせているかもしれない。「絶対似合わないから」と避けてきた色を身につけることで、思いもよらない色の感性効果（自らに対しても、他者に対しても）が生じることが期待される。⁴⁾

一方、衣服は「拡張された自己」といえるため、マイ定番色が強くなることは自己表現一貫性の観点からも理解できる。それに対し、身の回りの持ち物のたぐいはより自由度が高まる。たとえばスマホを買い換える際、色をガラッと変えたくなるだろう。車などもそうかもしれない。何年も使い、すっかり見慣れた色からの変化を求める心理はプレザントネス希求にほかならない。ただし、久野理論がいうように新規色の楽しさも一過性のものでしかなく、やがて見慣れたコンフォタブルな色へと変わる。このように、我々は無意識のうちに色のプレザントネスとコンフォタブルネスを循環享受しているのである。

5. 個人特性としてのプレザントネス傾向と紫嗜好

プレザントネス理論に魅入られた筆者は、さらにこれを生活価値観へと拡大解釈し社会的プレザントネスと名付けた³⁾。取り立てて問題のない暮らしは快も不快もないニュートラル状態（コンフォタブルネス）だが、そこに積極的な楽しさは見いだしづらい。人が楽しさ（プレザントネス）を感じるのは刺激的な変化が生じたときである。「安定・安心・普段通り」のコンフォタブルネスと「変化・驚き・意外性」のプレザントネ

ス、どちらも人々に望まれる価値観だが、そこには個人差もあろう。つまりコンフォタブルネス型（C型）人間とプレザントネス型（P型）人間だ。筆者は一時期、この個人特性と色嗜好との関連を検討した（AIC2015～2018¹⁾）。

研究手法はシンプルで、数百名の大学生を対象に対C/P傾向を問う質問紙調査と色嗜好調査を行い、その相関をみた。前者の質問紙は独自に作成した。その結果、C/Pに対するパッシブな感受性を測った場合（AIC2015）もアクティブな希求性を測った場合（AIC2016）も、C型は橙、P型は紫を好む傾向が確認された。さらにこの2色に対するイメージを測定したところ、C型は橙に、P型は紫に「安らぎ」を感じることがわかった（AIC2017）。とくに紫についてはスペクトルにない色であり、その人工的な印象とプレザントネスの性質（意外性や驚き）との親和性から考察を試みたが、残念なことにその後行った調査では上述の傾向が再現されなかった（AIC2018）。研究はここで一区切りとなり、明確な結論は得られていない。

6. おわりに

これも久野先生から聞いた話の受け売りだが、19世紀は車など新しい発明があり「便（usefulness）」が享受され、20世紀はその欠点の改良を通じ「適（comfortableness）」が満たされた。そして21世紀は、及第点以上の付加価値である「快（pleasantness）」が求められるのだと。車のたとえば具体的にはわかりやすいが、これからの世の中でプレザントネスに価値がおかれるという点は色に求める快適性にも当てはまるだろう。印刷・塗料・発光など各分野の色技術が格段に進歩したいま、我々のはかつてないほど自由に色を使える環境にある。その中で、サドンショックによる不快との境界を見極めつつ様々な生活環境において斬新な色づかいを試み、予想外で驚きのある色の楽しさ、すなわちカラープレザントネスを追求していくことが求められてこよう。

参考文献

- 1) Kuno S., Ohno H., and Nakahara N.: A two-dimensional model expressing thermal sensation in transitional conditions, ASHRAE Transactions, 1987, 93-2, 396-406
- 2) 久野覚：温熱環境における快適性 - Comfortとpleasantness, 基礎心理学研究, 1999, 18-1, 102-106
- 3) 高橋晋也：視環境心理学の試み(2) - 視覚的プレザントネスの可能性と問題点 -, 名古屋大学文学部研究論集, 2003, 哲学49, 61-75
- 4) 高橋晋也：衣服の色が与える心理効果の可能性と限界, 日本衣服学会誌, 2022, 65-2, 1-3

1 紙面の都合で文献掲載しないが、いずれもAIC公式HPからDL可能。